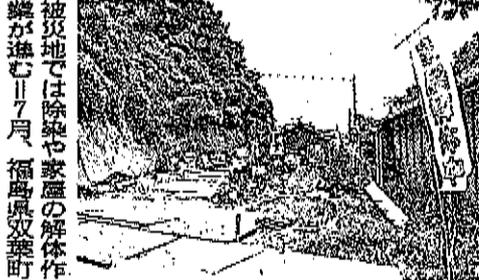


「寝耳に水」避難者ら反発

医療費支援の縮小 福島は

東京電力福島第一原発事故から10年8カ月。原発避難者に適用され続けてきた医療や介護の負担軽減策について、国が打ち切りに向けて動き始めた。復興の進んでいない自治体や避難者には動揺が広がっている。

「寝耳に水。とても受け入れられない」。福島県宮岡町の山本喜博町長は、国の減免措置の見直し方針に怒りをあらわにした。方針案で廃止・縮小対象とされた同町は、2017年4月に大部分で避難指示が解除されたものの、いまだ一部で避難指示が続く。山本氏は「町は復興途上。国には



被災地では除染や家屋の解体作業が進む17月、福島県双葉町



避難指示区域 (2011年4月22日時点)

「事故は終わっていないのに納得いかない」と憤る。葛尾村は今年8月に復興庁から方針案の説明を受けた。65歳以上が払う同村の

「真先に支援の維持をお願いしたい」と訴える。宮岡町から福島県いわき市に避難中の渡辺賢一さん(74)は、糖尿病が悪化した。数回の通院を続ける。「事故は終わっていないのに納得いかない」と憤る。葛尾村は今年8月に復興庁から方針案の説明を受けた。65歳以上が払う同村の

介護保険料の基準額は全国ワースト3位の月額8200円で、事故前の同3300円から急増する。「畑を耕していた村民が長引く避難生活で運動不足になり、急激に介護の対象者が増えた」(松本弘副町長)とい

「見直し対象の浪江町から福島県二本松市に避難中の原田雄一さん(76)は「病気が悪化し、医療費がかさむ避難者もいる。一律に決め

るのでなく、必要な人を見極め細かい対応をしてほしい」と注文する。減免措置の縮小で、被災自治体の人口流出が加速するとの懸念もある。住民票を避難元の自治体に残すことで減免措置を受けられる利点がなくなるからだ。宮岡町から東京都に避難するNPO法人理事長の市村高

「町に戻ってこない人は支援がなくなっても仕方がない。本音を言うにくだりケートな問題」と明かす。(宮本健、見崎浩一、井井哲也、福地慶太郎、滝口博之)

「原野のある双葉郡8町村からなる双葉地方町村会や自民党福島県連などは、国に保険料減免措置の継続を要望し続けてきた。福島県の内堀雅雄知事も「被災地の実情を踏まえた見直しを検討するように求めていく」とクギを刺す。ただ、複雑なのは、同じ県民や被災者でも避難指示地域の内外で支援の格差が

あることだ。見直し対象となったある自治体の首長は「同じ行政区域内でも差があり、分断を助長している」と指摘。国には「状況を早く是正してほしい」と見直し容認の考えを伝えたという。同じく見直し対象となっている川俣町のある町議は「町に戻ってこない人は支援がなくなっても仕方がない。本音を言うにくだりケートな問題」と明かす。

「原野のある双葉郡8町村からなる双葉地方町村会や自民党福島県連などは、国に保険料減免措置の継続を要望し続けてきた。福島県の内堀雅雄知事も「被災地の実情を踏まえた見直しを検討するように求めていく」とクギを刺す。ただ、複雑なのは、同じ県民や被災者でも避難指示地域の内外で支援の格差があることだ。見直し対象となったある自治体の首長は「同じ行政区域内でも差があり、分断を助長している」と指摘。国には「状況を早く是正してほしい」と見直し容認の考えを伝えたという。同じく見直し対象となっている川俣町のある町議は「町に戻ってこない人は支援がなくなっても仕方がない。本音を言うにくだりケートな問題」と明かす。

解説

原野事故から10年以上続いた医療や介護の負担軽減策は、高齢化が進む避難者の生活を支える重要な支援策だった。しかし、避難者が置かれた状況や被災地の復興度合いが大きく変わるなか、必要な手直しをせず、当初の制度をそのまま続けてきた政治と行政の不作為で、様々な「ひずみ」も生まれていた。

制度の長期化に伴う課題は以前から明らかだったが、政府が復興方針で制度の見直しに言及したのは、2019年。復興庁が関係自治体への打診を始めたのは、今年10月末の衆院選が終わった後の11月からで、政府関係者は「政治的に混乱しないため」と、選挙への配慮も認める。

減免措置が適用になる避難指示区域の住民と「自主避難」のために減免措置が適用外となる住民が混在する田村市や南相馬市のような自治体では、制度の長期化に伴い、住民の間には不公平感が広がった。それは東電から損害賠償を受けられるかどうかで、地域が分断された構図でもある。

本来なら、もっと早く、本心に支援が必要な人に重点化するなど、制度の見直しを行うべきだったのに、時間は無駄に費やされた。いまになって廃止を急ぐ政府の姿勢は、被災者を向いた対応とはいえない。いまからでも時間をかけ、被災者一人ひとりに寄り添った見直しのあり方を検討するべきだ。(編集委員・大月博樹)

復興の進んでいない自治体や避難者には動揺が広がっている。宮岡町から福島県いわき市に避難中の渡辺賢一さん(74)は、糖尿病が悪化した。数回の通院を続ける。「事故は終わっていないのに納得いかない」と憤る。葛尾村は今年8月に復興庁から方針案の説明を受けた。65歳以上が払う同村の

「町に戻ってこない人は支援がなくなっても仕方がない。本音を言うにくだりケートな問題」と明かす。(宮本健、見崎浩一、井井哲也、福地慶太郎、滝口博之)

丁寧に見直しにひずみ